令和５年度　江戸川区立第三葛西小学校　学校関係者評価　最終評価報告書

学校教育目標	「智(ちえ)・仁(おもいやり)・勇(ゆうき)」 智・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成 社会の変化に主体的に対応し、貢献できる児童の育成	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	「夢や希望を育てる学び舎としての楽校(学校)」子どもにとって通うことが楽しい学校 智：深く考え進んで実行する子　仁：思いやりのある子　勇：明るくたくましい子 「厳しく教え　温かく育てる」「信じて接し　愛して育てる」
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞ ・算数科の問題解決型学習を全教員で統一して進め、授業改善の成果が出ている。自分の考えを表出する力を伸ばすために、話型の提示やスピーチ活動の充実に取り組んだ。 ＜課題＞ ・児童が自分の考えや思いを表出する力の育成や場の充実については、さらに工夫を重ねていく必要がある。体力については全校運動遊びの内容や方法をより児童の意欲が高まるように改善していく。		

教育委員会重点課題	＜取組項目＞　・評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		年度末に向けた改善策
				取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
学力の向上	＜学力の向上＞ ・授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	・算数科の問題解決型学習を通し、児童が自分たちで考えを練り上げる学習過程を共通取組とした授業改善。 ・「誰一人取り残さないための学力向上アクションプラン」の推進 ・学力調査や学習状況調査の結果を分析して課題を把握し、指導改善に活かす。	・東京ベーシックドリル診断テストにおいて達成率80%以上の児童80%以上。 ・週2回程度、タブレット端末内の学習アプリ(ドリルパーク等)を課題として出す。 ・4年以上都調査「算数の授業内容はどのくらいわかりますか」で「よくわかる」70%以上(昨年度56%)	A	A	・校内全体で統一した学習過程に沿って授業を展開することで、各学年とも児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。都調査「算数の授業内容はどのくらいわかりますか」では「よくわかる」は、61%と向上した。肯定的な回答は93%以上いるので、さらなる授業改善を継続する。 ・スタディーウィークを中心に、全校でアプリを活用した学習を行い、既習の内容の振り返りや学習習慣の定着に向け取り組めた。今後、東京ベーシックドリルの診断テストでウィークポイントを抽出していく。	A	・アクションプランの目標数値について、今年度、目標を上回る結果なので、次年度の結果を見てからでよいが、上方修正してもよいのではないか。 ・一般的な授業の中に、ICTを様々な方法で取り入れて工夫していることが分かった。今後も継続してほしい。 ・教科担任制が学力にどう影響しているか、教員の働き方につながっているかなど、検証していってほしい。	・算数科の問題解決型学習の流れについて、1単位時間の学習過程を共通理解のもと進めることができた。日々の授業で繰り返し行うことで、児童が学習の進め方の1つとして習得できるよう、継続して指導していく。また、定着度についても、引き続き検証していく。 ・教科担任制の成果と課題について、校内でも確認を行い、次年度の計画に反映できるようにする。
	＜読書科の更なる充実＞ ・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	・年間指導計画に基づく、探究的な学習の実施 ・区立図書館との連携による学校図書館の環境整備、読書意欲の向上 ・読書科研修の充実	・学期ごとに1テーマ以上の図書を使用した調べ学習を実施する。 ・月1回教員による読み聞かせを行う。 ・各学年、年1回以上区立図書館との連携授業を行う。 ・図書担当教員を中心に複数の教員が積極的に研修に参加し、校内教員への周知を行う。	A	B	・朝読書や教員・図書ボランティアによる読み聞かせを通し、児童は読書に親しんでいる。地域図書館と連携した授業や、図書館支援員の活用も行えている。 ・学校図書館は読み物が多く、情報収集をする上で図書資料が十分でなく、活用場面が少ない。図書資料活用時間を設定した、教科横断的な単元指導計画を検討し、更なる活用を図っていく。	A	・本に接する時間が確保できているようなので、今後も継続していくとよい。地域図書館との連携も引き続き行い、本と親しむ機会を確保していけるとよい。 ・ICTの活用が昨今だが、百科事典や様々な書籍を手に取り、活字で調べる活動を多く取り入れていってほしい。	・読み聞かせや読書の時間の確保は概ねできているが、探究的な学習の内容の充実が十分でなかった。次年度に向け、読書科の年間指導計画を再考するとともに、学校図書館の資料についても整備していく。 ・区立図書館との連携については順調なので、年間を通した計画を立てられるように見直していく。
体力の向上	＜運動意欲や基礎体力の向上＞ ・体育の授業や休み時間における全校運動遊びなど主体的な運動の実施による運動意欲の向上	・全校運動遊び(勇遊タイム)の実施方法を改善する。活動場所を広く取り、児童の思いを活かし、児童が工夫できる内容とする。 ・朝遊び・業間休みの外遊び励行	・体力テスト合計点平均　各学年昨年度5%増 ・業間休みの運動量10%増	A	B	・全校運動遊びの実施方法を改善したり、朝遊び・業間休みの外遊びを意識付けたりしたことで、運動量は十分に確保された。体力テスト合計点平均は昨年度よりも約5%向上した。しかし、全国平均と比べるとまだ低く、体を動かすことの楽しさを感じ、運動意欲の向上に力を入れていく。そのため、様々な遊びを知ったり遊び方を工夫したりする時間を確保していく。	B	・いろいろな場面で体を動かす機会を設けていて、成果としても出てきているようでよい。 ・子どもたちがさらに意欲的に取り組める工夫や、体幹を鍛えられるような運動を取り入れ、さらなる体力作りに期待したい。	・全校運動遊びは計画通りに行うことができ、外遊びの励行も行えた。今後も業間休みの外遊びを励行するとともに、体力向上のための取組を計画し、実行していく。 ・体つくり運動を取り入れることを意識した授業改善を進める。
共生社会の実現に向けた教育の推進	＜特別支援教育の推進＞ ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の実施・充実	・通常の学級と固定級の交流・共同学習の実施。 ・特別支援コーディネーターを中心とした特別な配慮の必要な児童への支援策についての協議、研修の実施。 ・1単位時間ごとのエンカレッジルーム担当教員の設定を毎週行う。	・週に1度の生活指導夕会 ・特別支援校内委員会　月1回の実施 ・通常の学級と固定級の交流・共同学習　学期1回以上 ・障がい理解教育　年1単元(4年) ・特別支援教育校内研修会の実施　年1回	B	B	・個々への対応や支援について、共通理解を図りながら取り組んでいる。学校として、教員の対応に差がなく、同じ対応方法や支援によって児童の安心感につなげていく。 ・通常の学級と特別支援学級の児童が、日常の教育活動や様々な行事を通して、多くの時間を交流することで、互いの理解がさらに深まった。	B	・概ね、現在の進め方でよいと思う。通常の学級の中でも支援を要する児童が増えているように感じる。児童のためになるような支援体制を保護者と連携して進めてほしい。	・日常的に行事等は、通常の学級と固定級で共同学習を行い、学年を主たいだ交流活動も行えた。特別な配慮が必要な児童の支援についても、保護者と連携し、対応を行っている。校内委員会を充実させ、さらに円滑に適切な支援ができるよう、体制を整えていく。
子どもたちの健全育成	＜子どもたちの健全育成に向けた取組＞ ・不登校対策の実施・充実 ・教育相談の強化 ・hypaer-QUの活用	・いじめに関するアンケート　年3回の実施 ・不登校に対する組織的対応を行うため、SCやSSW、外部機関との連携。 ・hypaer-QUの結果を、学年で共有し、居心地の良い学級にするための資料とする。	・いじめの早期発見、解消率100% ・不登校児童の保護者や関係諸機関との連携100% ・hyper-QUによる学級満足度要支援群の出現率5%以下	A	B	・いじめの把握調査や日常生活の中での児童の変化を捉え、いじめや児童間のトラブルの早期発見・対応に努めている。特別支援コーディネーターを中心とした教員間での情報共有を常に行い、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等も活用し、児童の実態把握に努め、幅広い視点から児童理解を図っていく。	A	・社会一般的に不登校傾向の児童が増えていると聞いている。無理に登校させない支援と、登校を後押しする支援のどちらかに偏ることなく、保護者と連携し、バランスを大切にしていってほしい。	・定期的な調査だけでなく、日常の児童把握に努め、早期発見・早期解決に結びつけることができる事案が多かった。今後も児童のわずかな変化を見逃さないよう努め、保護者とも連携して児童が安心して登校できる環境づくりを推進していく。
地域に広く開かれた学校(園)の実現	＜自校(園)の取組の積極的な発信＞ ・学校(園)ホームページの充実等 ・学校(園)公開の実施・充実	・学習活動や各種行事等の教育活動の様子を発信する。 ・学校公開では、参観者数の制限を設けず、保護者や地域の方々等に参観いただく。 ・近隣の幼稚園・保育園との連携を図り、接続を図る。	・各学年、月2回以上の学校ホームページの更新を行う。 ・年4回の学校公開や各種行事の参観を実施する。 ・適切な時期に各園1回以上の見学・交流などを実施する。	B	B	・今年度は制限をかけることなく、学校公開、各種行事の参観を実施することができた。教育活動をホームページで発信したり、Tetoruを活用し参観を案内したりした。 ・近隣園や区施設の未就学児の見学受け入れを可能な限り行い、円滑な接続ができるように取り組んでいる。児童と園児の交流も増やしていく。	A	・ホームページは以前より更新頻度が上がっていてよい。行事以外の日常の様子をもっと発信できるとよい。 ・Tetoruの活用はよいと思うので、今後も上手に活用していってほしい。ただ、紙で配布したほうがよい場面も出てくるかとは思うので、状況に応じて使い分けていけるとよい。 ・幼保小の連携は重要なので、無理のない範囲で活動を取り入れていってほしい。	・学校での教育活動について概ねホームページで様子を発信することができた。各学年ごととなると偏りが見られるため、適宜更新状況を確認するよう、組織的に取り組んでいく。 ・近隣幼稚園・保育園等調整し、受け入れることができた。交流も設定することができたので、次年度の計画作成の際に、継続的な取組として検討していく。
	＜学校関係者評価の充実＞ ・教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施	・学校評価の効率化、適正化を図るための評価項目の整理および回答方法の工夫など実施方法の改善	・各項目「十分満足できる」「ほぼ満足できる」の肯定的な回答80%以上	B	B	・学校評価について、昨年度からICTを活用し、回答や集計の円滑化を進めてきた。また、評価項目について、現在の取組に沿うよう修正した。	B	・ICTの活用によって、回答する側も、集計する側も利便性が上がっているようなので、継続していけるとよい。ただ、項目によって、外部からはわかりにくいものが散見される。内容についてはさらなる精査が必要と感じる。	・ICTを活用したことにより、回答から集計の流れは円滑化した。しかし、回答率が下がっていることや、質問に対し「分からない」の回答率が増加したことから、方法および内容を再検討していく。
特色ある教育の展開	＜豊かな心の育成＞ ・異学年交流(きょうだい学級)による指導の充実	・全校オリエンテーリングや集会等、年間9回程度の学年の枠をこえたグループ活動を行い、関わりの中で自己肯定感や自尊感情を育む。	学校評価　問2「仁・思いやりのある子どもの育成」及び、問12「豊かな心を育む学習」の項での肯定的な評価80%以上	A	B	きょうだい学級活動を通し、上級生は下級生に親しみやすい接し方を考え、下級生は上級生に感謝の気持ちをもち、互いに関わり方について考えることができている。	A	・異学年交流として、充実した活動を行えていてよい。豊かな心の育成に向け、飼育活動や動物に触れる機会(区内のポニーなど)を検討していけるとよいのではないか。	数値目標について達成できた。さらなる向上を目指し、様々な教育活動のねらいや実施案を再検討するとともに、校内での共通理解のもと指導にあたっていく。